

ミレニアム・プロミス・ジャパン 第12回研究会

被災地の現場から～民の力で支援から復興へ

【講師】 多田克彦氏 (多田自然農場社長)

【日時・場所】 7月1日(金) 午後6時30分～8時30分
虎ノ門会計(虎ノ門LLP) 6階セミナールーム

- 【概要】
1. 震災当日
 2. 釜石での支援活動
 3. 今後の課題
 4. 質疑応答

1. 震災当日

震災から3か月経ち、皆様のおかげで大きなうねりとなって協力支援をいただいていることを本当に感謝している。というのは、初めは、たった一人の個からスタートしたからである。

3月11日、遠野は春うららかな日で、私は育苗のハウスで仕事をしていた。2時40分過ぎ、地震が来る前に山が鳴り始めた。私の農場は山に囲まれているが、山が全て動き始めて、この世のものとも思えぬ恐怖感を初めて経験した。これはすごいぞと思っているうちに地震が来た。明治の初年に建てられた土蔵があるのだが、この蔵が横にスイングしている。私は初めて建物がスイングするのを見て、その瞬間、今まで自分がゼロから立ち上げてきた工房や牛舎、農場、家が全て倒壊すると思った。地震が5分間続いて、そのうちに、うちの工房の人たちもどうしようもなく、庭に飛び出てきた。庭に置いてあった3台の車はバウンドしていた。この異常な経験に、私は初めて恐怖感を抱いた。都会ではそのときビルが揺れたりしたと思うが、私の方で震度6ということだった。ラジオでは、1メートルの津波がくるらしいというのが第一声だった。これだけの揺れと恐怖感で、震度が6もあるのに、まさか1メートルということはないだろうと思ったが、それからどんどん増えてくるわけだ。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

この半端ではない揺れが5分間続いた後には、しんとした不気味な静けさが残った。さっきまであれだけの地震と山鳴りがあった田舎の風景が、春ののどかな風景に一瞬変わり、さっきの揺れは何だったのかという、不気味なしんとした雰囲気のみ込まれた。私はその瞬間、フランクルの「夜と霧」というアウシュビッツ収容所の体験記を書いたドキュメンタリー小説の一説をちらっと思い出した。収容所から解放された瞬間の人間の心理というようなものを一瞬感じ取ったのだ。要するに、生きたと思った。生かされたと思った。それは、この地震は一体何であろうと疑問を抱いた瞬間であった。

それから当然停電になり、全てのものがストップした。私は農業をやっているのので、すぐに食べ物をチェックした。まず米であるが、もう一年分あった。漬物ももう一年分ある。水は、断水になっても山から澤水がひいてある。それから燃料は、山に行って炭を焼けばいいなと、そういう発想で全てチェックをした。とりあえず、まずは一年間皆が困っていてもうちは食べるものはあるというふうに安心感を持ったが、電気がストップしているために牛舎が大変だ。牛舎には牛がいて、全て電気で搾乳し、電気で冷蔵にかけてというように、全て電気でやっているのが、全てストップしている。搾乳機が使えないため、手搾りで全て行ったわけだが、これにはまいってしまった。機械では、一頭あたり20キロ絞るのに3分から5分かかかるが、手で絞ると一頭当たり10分位かかる。それを40頭から50頭絞るとなるとその日は夜中の12時までかかり、しかも、冷蔵庫がないものだから、牛乳を入れても捨てるという状態だったのである。それが、電気が回復するまで毎日のように続いたわけだ。たまたま私のところは一晩だけ暗闇の生活をしたが、実は全然怖くなかった。というのは、2月に(MPJ)の鈴木理事長と、電気もガスも水道もないアフリカに行き、そこで牛乳をどうするかというプロジェクトに行ったものだから、すぐにアイデアが湧いて仕方がなかったのだ。マリの首都バマコから、車で3時間も4時間もかかる村まで、鈴木理事長のパッションでついていったようなものだが、そこで色々なものを見た。電気・ガス・水道というのは別になくなっても平気だというのは、そういう環境でずっとやっていたからである。

ところがその日の晩、家に釜石からカソリック教会の牧師が来た。釜石は大変だから、私に動いてくれないかという話だった。うちのテレビは地震で倒れてしまい、テレビを見ていないから津波を一切みていない。一晩暗闇の中であろうそくをつけながら、これは大変なことになったとラジオを聴きながら思ったのだが、電気が通ってから全YouTubeで見た。それと同時に、海外から私に送られるメッセージがすごかった。日本がつぶれるというメッセージで、原子力発電の問題がものすごかった。そうしたメッセージを受けて、日本よりも海外から流れる情報で危機感を募ったというのが実態である。どうするべきか自分の中で色々考えて、二日後に思い切って釜石へ行ったのである。

2. 釜石での支援活動

■ 釜石の状況

遠野から釜石には高速道が走っているが、それがストップになっていた。くねくねとした冬道を、当時はガソリンもなく、危機的な状況の中でとにかく見に行き、びっくりした。釜石の駅前に新日鉄釜石があるが、その前まで津波が来ていた。ざっと見て、車が500~600台ひっくり返っていた。今まで見たことがない惨状で、あまりのひどさに、驚きも感動もなかった。土砂と瓦礫で車が通れない状態だったので、車を駅前の入り口において3キロ位歩いて行った。遠野と釜石は昔から経済圏交流などで動いていたから、私には友人知人がけっこうおり、釜石のカトリック教会まで行った。そうしたら、どういうわけかマリア様の立っている像の前で全ての瓦礫がストップしている。これは何か意味があるなと感じ取った。広島、長崎の原爆の時もそういう逸話が色々ある。それで、釜石の信徒会の代表者と会って、これはすごいことになったと話をしながら、我々として何ができるだろうというのが最初の会話だった。教会そのものは津波には侵されたが、破壊はされていない。被災地のど真ん中に残っているということは集会所として使えるので、なんとかして生かそうというのが一つあった。

それから、釜石の場合、街中は被災しているが、壊滅的な状況にはなっていなかった。それは、釜石にはギネスブックに載っている大防波堤があるのが大きかったのが一つある。もう一つは、新日鉄釜石が企業城下町として段々縮小していったときに、釜石製鉄所が家具の岡村やSMCといった会社を誘致したり、あるいは丸紅のグリーンセンターを海に誘致したりして、かなりの大工場があったことだ。その大工場の港の建物が、津波の防波堤になったのである。これにより一部の商店街は残って、1階はやられてしまったが2階3階は大丈夫だというのが釜石の特徴だった。陸前高田や大槌にはこうしたものがなかった。

■ リアス式海岸の特徴

リアス式海岸というのは、一つ一つの湾ごとに町が建設されていて、湾ごとに言葉もちょっと違うし、人間も違う。今回の震災が阪神大震災と一緒にならないというのは、湾ごとに必ず峠を越えるか、トンネルを行かなければならないので、連絡がつかないということである。

もう一つリアス式海岸の特徴というのは、湾ごとに潮の濃度が違う。これが実は売りだった。三陸のワカメとか、三陸の養殖もののホタテとか色々あるが、三陸という名前ではだめだ。湾ごとに塩度が違うから湾ごとにできるものが違うということをもう少しやればいいのだが、三陸という統一した見方をするのは、実は危険なことがある。

このように湾ごとに全部違うのに、それが分からずに支援を色々しようとしても、それは無理だ。

■ 支援の開始

釜石の町は何とか残り、1階はだめだが2階3階が大丈夫だったために、電気もガスも水道もないところで、夜を過ごす人がいた。壊滅的な被害を受けて、体育館や中学校に500人とか800人といった集団で避難した場所には、当然行政が支援に来るが、こうした、街中でそれぞれの家

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

族で住んでいるところには、食糧も水も支援がなかった。それで我々は、そういうところの支援をするために、教会をベースにして食べ物を持ってきて支援を始めた。それも、個人で金を持ち出ししてやった。うちには米も、野菜も、漬物も、牛乳も、プリンもある。それらを車で積んで持っていくと、夜家に帰って寝る方々が取りに来て、あっという間になくなった。

もう一つ、釜石の方に聞くと、実はいつも地震はあって、津波警報が出ていた。しかしこれまで過去何年と津波が来ても、50~60センチ程度だった。だから今回も津波が来たという時に、またその程度だろうと判断した人が多かった。そこで、消防署、救急車、警察が町中で今回は大変だから早く逃げようとスピーカーで町中を走っている中に津波が来たために、町中で救急車、消防車、警察車がひっくり返っている。また、宅急便の車もひっくり返っている。これは今回の特徴だった。地震発生で20分以内、それもとんでもない高さの津波が来た。釜石の場合は、すぐ山が迫っていて、山の上にお寺がいっぱいある。人々はそこに靴をはく暇もなく、サンダルで逃げ込み、そこにいついたために、お寺が全て避難所になった。最初の日の食事は白菜の漬物が一切れだけで、二日目はおにぎり1個を4人で分けたところからスタートした。仙寿院という日蓮宗のお寺には100人程避難した人がいて、本堂が生活の場となった。そこで食事が無いということで、遠野から、何がいいだろうかといいいながら運んだ。

最初に私が行ったときに動いていたのは自衛隊で、これはすごかった。自衛隊は、トラックに色々ながらくたを乗せて、道路を確保した。そして、警察は交通整理を行った。普通、彼らの動きはあまり知られていないが、自衛隊と警察がいなかったら、復旧は難しい。今回、彼らをやはりたてなければならぬと思った。復旧作業をやっていると、遺体が出てくる。遺体が出てくると、確認のために全てストップする。

私が毎日支援をしながら感じたことは、一日行くと、遺体が出た場所というのは二日行けなかった。一日支援して、夜帰ってくる。そうすると、まっ暗闇のゴーストタウンを車で行くと、そっちこっちが遺体の出た場所だ。目に見えない何かというか、とにかく疲れてしかたがなかった。夜のまっ暗闇の状態の中を、遺体が出たところを通るといのは、私自身が本当に魂をやられた。それで、一日行ったら一日休むという形で支援にいった。

そのうちに、ネットで色々な情報が来る。釜石自体は携帯も通じないので、皆、NTT 東日本の本部があるところに来て、そこから公衆電話のようなものを使って連絡したり、東京にいる娘さんを通して情報を聞いたりして、釜石にいるご両親の必要なものを探して持っていったりした。そのときに、山田周生氏というバイオディーゼルという天ぷら油で、世界中を走っている方に出会った。毎日ブログを書いて発信しながら歩いていて、この方が三陸の旅行をしている途中で被災し、帰れなくなってそのままいついてしまった。そして彼が、誰も行かないところに、うちから毎日、天ぷら油で牛乳を運んだ。私が牛乳を出しているという噂を聞きつけて、陸前高田、釜石、山田等から相談があり、出してあげたのが最初のスタートだった。

■ 支援物資について

日本のすごさというのは、こうした震災が起きてから物が溢れるのに2週間かからないところ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

だ。10日あれば、パンからカップヌードルから米から、本当にすさまじい勢いでものが集まってくる。ここがやはり日本のすごさだと思った。

ところが、その集まったものをどう振り分けるかといった時に問題が起きた。800人を収容する体育館では、800人分ないと分けない。前に住民同士でケンカが起きたので、市役所の職員は、申し訳ないが数が揃うまで配れないということで、物はあるのだが配れないということがいっぱいあった。

■ 行政との関係

我々は、行政が関与しているところは任せて、山のお寺や、町のお年寄りが一人で住んでいるところ等を支援した。こうしたところは情報が入って来なかったために、行政が行くことができなかったのである。我々は支援をやりながら、物を取りに来る人たちや食べに来る人たちから話を聞いて、点と点を結びながら歩いていた。それを3月13日からずっとやっていたわけだが、かなり効果があった。決して行政と仲が悪いわけではなく、行政の手が回らないのだ。行政というのはあくまで正常なときに機能するものであって、不測のときに機能するのは行政ではない。だから、行政も一生懸命やっているのだが、慣れていないためにどうしたらいいかわからないのだ。異常時の組織の在り方、異常時のリーダーの在り方、異常時の人間の生きざまについて、日本ではこれまで研究や討議などをやってこなかった。いつも平常の状態の中で我々は議論し、平常な中で生きてきた。それが今回の場合、リアス式海岸という地形もあって、全く情報が分からなくなってしまったというのが特徴だと私は思っている。そこで、民間がやらざるをえなかったのである。そのうちに、自衛隊が今度は孤立した場所に弁当を届け始めた。釜石市の職員も一生懸命やっていた。彼らとも随分色々話をしたが、どこかに物が届いていないというと、必ず職員は行っていた。私たちも全部情報を流して、あそこはこういう状態らしいので行ってみてくださいと言うと、釜石市の職員は飛んで行った。そして、実は違うことになっていたとか、必ず報告があった。そういう意味では、一生懸命やっているのだが、異常時の体制、異常時の組織の在り方については、日頃から訓練しなければいけない。

日頃からの訓練で象徴的なのが、鶯住居保育園である。鶯住居保育園は、津波で建物が全てやられてしまったが、一人も死者が出なかった。その理由は、厳しい避難訓練にある。ストップウォッチを持って、10分24秒あれば、全員が高台に上れるという訓練をやっていた。他方、同じところに幼稚園があるのだが、そこでは死者が出てしまった。このように、厳しい事情の中でやっているところでは、命が助かったというケースは、しょっちゅう聞いた。

もう一つ聞いたのは、民間の方々が車で運転しながら道路を流され、車に水が入ってきたので危ないと思って窓から逃げ出した。そのときに、流れ着いた畳で助かったという人が今回随分いたようだ。畳は浮くらしいのだが、それによって命が助かったという話をけっこう聞いた。

■ 支援の内容

私も釜石を見て、釜石から北の方に車を走らせたところ、びっくりするほど完璧にやられてい

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

た。大槌町などは、皆さんご存知の通り、議会の途中で町長もろとも流されたという話だった。今回の震災で私は一民間人として釜石市に応援に行ったが、2週間後に、食糧の次は衛生問題だと思った。避難している人々は、風呂に入っていないわけだ。各避難所を回ると100人単位で暮らしていて、昼間から毛布をかぶってお年寄りが寝ている。そういうところで風邪がはやっていたから、肺炎でやられている人もけっこういた。

漁業者は、日頃からお互いに食べ物を融通し合う精神があったために、毎日獲った魚を日干しにして、ドラム缶で薪を焚きながら毎食交代で食事当番をやっているコミュニティもあった。

私も色々な所に配って歩いたのだが、意外と喜ばれたのがプリンと牛乳だった。なぜかという、カップヌードルとパンばかり食べているので、牛乳を持っていくと便通がよくなるというものすごく喜ばれた。また、プリンは、お年寄りや子どもが、甘いものを食べるとほっとするといっ、どこでも受けた。だからうちは3月中、被災して全てのものがだめになっているときに、毎日被災者のためのプリンを作って配送した。

正直、やりながらいつまで持つかと不安だった。そのときに、私一人の金ではなんとかならないから、皆さんから集めるということになり、支援を要請したところ、IBMの方々から続々と金が集まった。

物は10日あれば集まってくる。震災4日後に、私のところに最初に来たのが大阪ホームレスの会で、トラックに沢山のものを積んできた。もう一つは、難民を助ける会で、4トン車で沢山のものを持ってきた。我々とすれば、この物資をどうやって届けるかというのが問題だった。普通は平等に配るところだが、ただ持っていってもだめだろうということで、教会の巨大なホールに色々なものをスーパーマーケットのように並べて、そこから自由に持っていく仕組みを作った。これをオンデマンド方式と私は言ったのだが、こういうことをやったのはおそらく我々が初めてではないかと思う。お茶やコーヒーは皆が持っていく。当時冬だったので、防寒具も随分集まった。

この震災を通じて、日頃会えない人間と会えたというのは、私にとって大きかった。また、物をほしいときは、ここに電話をすれば一発で来るというのが分かったし、衛生用品、たとえば歯ブラシや石鹸も、ほしいという何千個と来る。そっちこっちの避難所で物が余るという現象になって、避難所同士で情報交換をしながら、随分物々交換を行った。

それから、私は食の関係をやっているの、全国の「確かな味を造る会」のメンバーがいて、メンバーから、被災者のためのスープを作る、あるいはおそばを作る、スパゲティを作る、そういったものも全部いただいた。とにかく私は、あげるというものは、全ていただいて、善意に報いることにした。民間としては巨大な部屋を確保して、そこにボランティアを派遣して、毎時仕分けをして並べるという作業を行った。

それから、当時はまだ風呂がなかった。そこで地元の葬儀屋の社長さんに交渉して、100キロ先の東和温泉に被災者を連れていくバスを出してもらうことになった。ピストン輸送で合計400人の被災者を連れて行った。最初に乗る時に、被災者の方というのは、やはりものを貰い続けているから慣れてしまっていて感謝の言葉がない。そして、バスの雰囲気も暗い。そのバスの中では色々

な会話に耳をたてて、何をほしがっているか聞くようにした。そして、温泉に着いて、温泉に入った瞬間に、被災者の方々の顔色が、がらっとかわる。要するに震災地を離れるのがよい。震災の場所で避難所にいるのを一旦離して、お風呂に入れる、そして隣の部屋に物資をきれいに並べて、そこで新しいものを持ち帰るという仕組みを作った。そして、遠野へ寄って私のお店でソフトクリームを食べさせてもらい、今度はラーメン屋に行って、ラーメンを食べさせて帰すという仕組みを4月一杯ずっとやった。この温泉ツアーはすごい人気になった。実は鈴木理事長にもボランティアで一時、そのバスに乗ってもらった。そのときに彼女がすごかったのは、当時自動車道もだめで鉄道もダメだったときに、秋田空港から一人で遠野に入ってきた。この行動力には私は驚いた。

このおかげで釜石市役所に温泉課という、被災者をお風呂に入れるための課ができた。その後、自衛隊が共同浴場を作る動きを始めた。現場に立って、経営者の視点でものをみれば、何を彼らは望むかはすぐわかる。これはやはり経営者でないとわからない部分がある。私も人事で苦労しているから、普通従業員と言うのは口に出さないが態度で示す。それを感じ取っていかねばならないので分かるのだ。だから、先に手を打って行った。そういう風にして4月一杯はこんな活動をしながら、ボランティアは一切受け付けなかった。

■ ボランティアの受け入れ

ボランティアにきたいという話は、色々な NGO や NPO から随分あった。しかし、釜石には受け入れる場所がなかった。そこで私は教会を全部整理して、泊まれる部屋、食事を作る部屋、会議する部屋という風に全部作った。最初のボランティアを連れていったのは4月3日だ。これは、瓦礫除きのボランティアで、おそらく震災現場で最初に入ったボランティアだと思う。このときのボランティアの要請はすごかった。町中、色々なところから来てくれと言われて、彼らは高校生で高校の授業の一環でやっているものだから、夕方までできない。でも彼らは一生懸命やって随分と評価された。

4月5日からは、カリタスジャパンという NGO を窓口にして、仙台のサポートセンターから保険をかけて、釜石、石巻等に人を派遣する仕組みを作った。それが今もずっと続いている。4月下旬から5月の連休にかけては、最高で一日50人受け入れをした。その上、色々な人が見に来るので、4月中はボランティアの方々の元気づけと食事の世話と、スケジュールの調整等で大変だった。

■ 本業との両立

私自身は、本業がボランティアではなくて、牛乳の製造と販売、あるいは農業の仕事が主なので、4月30日までやったら後はお任せしようとしてスケジュールを立ててやっていた。仙台の空港に私の物流センターがあったのだが、これが震災ですっかり流されてしまった。牛乳あるいは食糧の物流というのは、仙台が拠点で、仙台からトラックが全て出ている。特に私の場合は大阪が販売網として大きい。4月1日から出さないと、自分の棚場がなくなってしまって他の商品が入

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ってしまって困るので、私の仕事としては、4月1日から絶対に商品を出すという計画をしていた。しかし、牛乳の紙パックを作っていた日本製紙の石巻工場がだめだった。また、茨城と福島にあった、オリゴ糖やブドウ糖を作る工場が破損した。そこで群馬まで行って群馬から取り寄せ、牛乳のカートンは日本では無理だから韓国から輸入するという仕組みをとった。

うちの会社が回って初めてこうしたボランティア活動ができるものだから、裏ではそういうことをしていたのである。そして、4月3日、クロネコヤマトと佐川急便が動き始めてから、フル生産に入った。

■ 経営者への期待

だから、今後の震災の復興に関しては、私が一番期待をしているのは経営者だ。なぜかというところ、新聞には出てこないが、釜石の経営者は動いているのだ。雇用を創出し、地元の産業を育成する決め手は経営者にかかっていると思って、今、経営者と色々話をしながらやっている。経営者は、日本のことを真剣に考えている。実際に、釜石の水産加工場はとにかく動いている。今回の震災で、4億、5億の借金を抱えることはざらで、彼らはリスクを背負ってスタートしようとしている。私の友人も、来年の4月から稼働させるために5億投資すると言っていた。彼は今は9人の従業員を抱えているが、前は100人いた。それを一旦解雇し、解雇した人々は避難所に入ってしまった。しかし、避難所で3カ月生活すると、避難所を離れられなくなる。これがおかしい。今、前にいた従業員をもう一回雇用しようとして声をかけているが、避難所がよくて戻って来ないというのだ。これは一体なぜか。物を貰い続ける人生をやってしまうと、自立しようとする気がなくなってくる。これが今問題になっている。だから今、仮設住宅ができて入っているが、仮設に入っても、そこで食事を作らずに、避難所に行って食事をするというのは、こんなに馬鹿な話はあるかと思う。だから人間というのは、貰い続ける人生を、1カ月なら1カ月にしないとだめだ。それがわかって、私が支援していたお寺などは、5月になってから、早く出てもらいたいがために、温かいものを出すのは止めた。ところがそういうことを言うと、避難所では温かいものを出さないでかわいそうだという話になる。そういう情報のギャップがあるのだ。物が届いていないという話にもなっているが、物はある。あるけれども、人数分揃わないと配らないのである。それから、自立させるということをキーワードにしなければならない。物を配ることが、NGOにしてもNPOにしても役場にしても、大変問題があると思う。我々はハイチやインドネシアではないのだ。日本なのだから、自立ということをテーマに考えてやらなければならない。

■ 自立に向けた支援

現実に今、政府はこれから第一次、第二次、第三次と補正予算を編成するが、おそらくここにいる方々は、その話だけは聞いているが、内容は全くわからないと思う。実は今、内閣府からこのような冊子が出ていて、具体的に書いてある。それを見ると、漁業者が10人なら10人でグループを作って海の瓦礫を除けば、1日12000円貰える仕組みがある。それなら自分たちで働いてそういうことをやろうという動きがあってよいはずだが、それが出てこない。更に、仮設の店舗

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

を構えるときに、国が100%出す制度もいっぱいある。今問題となっているのは、そういう補正予算の内容が、地域の住民にきちんと行き渡っていないことである。この予算は最終的には第三次で10兆円とっている。この10兆円の内容がこれから出てくるが、それを具体的に噛み砕いて説明するということがないために、地域ごとにものすごい格差が生じてきている。だから、私は、今度の予算の中で国がやれることを住民に説明するような場所を設けて、イベントをやりながらお知らせするという仕組みを作っていくことが、これからはなければならないことだと、NGOの人々に言っている。もう、物を配るのではなくて、自立するための方向を見いださなければならないのだ。

たとえば釜石に玉泉堂という有名なお菓子屋さんがあったが、そこがなくなった。後継者がいないということで、そこに住んでいるお母さん方に、釜石復興のためにおいしいパンを焼いて町中にその香りを出さないかという声をかけても、地元では動きが全くない。むしろここは、今ボランティアで来ている人の中に勢いのよい人が何人かいる。そこで、釜石でこういうことを考えてやらないかという、移住して来て釜石でやりたいという人がもう何人かいる。むしろ、釜石市民ではなく、ボランティアに来ている人たちを定住させて、彼らを釜石市民にして、企業で働くという仕組みをやった方が、わりと復興への足がかりとなるのではないか。地元の人間にこだわると、これはなかなか難しいような気がする。だから、これからの支援の在り方は、自立というものを考えなければならない。

それから、心のケアの問題は色々あるが、一番大事なのは、避難所からお年寄りを出して、太陽の当たるところで草を取ったり、花を植えたり、具体的な活動をすることである。そうでないと鬱になるのは当たり前だ。今でも避難所は、1日3回物が出るようなところもあるだろうが、基本的には釜石の場合には、出さない方向になっているから、自分たちで生活しなければならないという状態になっている。

それから、港町というのはどうしても敷地がないので、建物を建てる場合は、農地に建てざるを得ない。そうすると今度は、農地法の問題が出てくる。農地に建物を建てる場合、農業委員会を通して、農地を宅地に転用するという手続きが必要になる。本来ならば、国会議員は、時限立法で早くこれを簡単にできる仕組みを作らないとだめだ。釜石の場合は、体育場と中学校の校庭は、全部仮設住宅になっている。どんな小さな公園も全て仮設になっている。だから、こういう意味で、行政の役割と、政治家の役割と、民間の役割というものを、明確にすることが大事だと思っている。

私は、できれば機会があれば釜石を見てほしい。釜石の復興が一番早いと思うのは、新日鉄釜石があるからだ。新日鉄釜石は、今は線材しか作っていない。世界のタイヤの確か6割が釜石製鉄所の線材で作られている。岩手の場合は北上、金ヶ崎いうところに、トヨタ自動車を年間40万台~50万台作る、関東自動車の工場がある。君津で作った鉄板等を船で釜石に陸揚げして、トヨタの工場に運んで作るとか、あるいは、愛知県からJR東海とJR東日本が毎晩20貨物位、盛岡まで車の材料を運んでくる。それで、地元の調達率を段々上げようとしている。3年か5年後には、内陸と釜石を結ぶ高速道が開通する。それはトヨタの物を運ぶ道路だ。だからこの高速

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

道は無料だ。そこが一つの振興のシンボルとして、釜石が新しい街づくりとして提案して、どこよりも早くたってほしい。そういうモデルがあると、私たちも続こうという意思が出てくると思う。

もう少し水産加工の話をする。釜石の水産物は、釜石の港から揚がったものを一切使っていない。今の三陸海岸の海というのは、地場で食べる魚くらいで、加工に向く位の量は揚がっていない。釧路、八戸、気仙沼に揚がったものを、トラックで釜石に持ってきて加工している。だから彼らは動きが早い。要するに、原料は釜石から揚がらなくてよい。他から持ってくればよい。そこで、とにかく稼働させるということで、もう動いている。これからますます加速してくるし、日本政策投資銀行等も、そういう案件で、低利子で貸し出すような仕組みを出している。だからいち早く経営者に動いていただいて、雇用を確保して、働く場が確保されて、賃金をいただくということが具体的にあると、希望が見えてくる。仕事がないということはお金が入らないということだから、希望を見出せない。だから私は、仕事づくりをどうするかという部分に一番はっばをかけて、こういう制度もある、ああいう制度もあると一生懸命議論はしているが、被災地の方というのはなかなか動かない。この問題をこれからどうしていくか。むしろボランティアの人の方が、問題を把握して自分たちで動こうとする。

それから釜石の場合は、今回の被災地の中で人口の高齢化率が一番高い。年金族がすごく多い。私が見た感じではそういうことを感じた。

3. 今後の課題

ではこれからどうするか。一つは、花を植えるプロジェクトを今やろうとしている。被災したところはやはりどうしても町が暗い。そこに、お年寄りあるいは住んでいる方々が花を植えるという話をしたら、全国から色々なアイデアや種が集まってきて、特に骨髄バンクからアサガオの種を5万粒出したいという話があった。後は花壇の土から何から全部、うちの畑から持っていったりして色々やるつもりだ。とにかく、花を植えさせてお年寄りを外へ出して、手作業をさせるという仕組みをつくらなければならない。

それから、仮設住宅でコミュニティをどう作るか。これが一番問題である。それで私は若い人々に、仮設住宅をリヤカーを引きながら物売って歩けと言った。一軒一軒回りながら、お年寄りとお話をしながら、歩かせるつもりでいるが、これもどうなるか分からない。しかし今、南米のパラグアイに移住して大豆を作っている方々から、その大豆を日本に届けて豆腐を作り、100万個送るので、それをただで仮設住宅に配ってくれという話がきている。パラグアイというのは、岩手県からの移住者が非常に多いところで、大豆を作っているのが縁でそういう話がかっている。

それから、7月16日に釜石で、400人分のホッケと磯汁と米と漬物で炊き出しをやるのだが、それをやりながら、政府が今回の予算をどのようなメニューで作っているかという説明をする予定だ。人が集まって、そこで情報を流して、これに応募してくださいという説明をさせながらメ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ニューを知らせる、ということこれからやろうとしているところだ。

また、当然出てくるのは遺産相続等の土地の問題、借地の問題である。釜石は、お店のほとんどは借地でやっているの、色々問題が出てきている。だから、弁護士やそういう方々が入り込んだ相談会などをやってほしいと思っている。これは是非必要だ。私にもそういう相談が結構来る。また、釜石の土地を早く売って金を貰って早くいなくなりたい、というのも結構ある。実はそういうところを買って、ボランティア専門のセンターでも建てるかと言う話をしているが、高くふっかけてくることも多い。

寄付金は、カリタスでは4億円くらい集まっているはずだ。これがどう使われているかは私にはわからない。それから、ジャパン・プラットフォームというNGOには63億円集まったという。この金はどうなるのか。そういう意味では今はNGO、NPOのバブルだ。

遠野でも今、私の「風の丘」という産直場はすごい売り上げをあげている。遠野のホテルや旅館は、7月一杯、空室がひとつもない。救援のボランティアの宿泊場になっていて、復興景気に沸いている。基本的に、陸中山田、宮古、陸前高田に行くにはすべて遠野が拠点となる。自衛隊の本拠地も遠野だ。なぜ遠野かと言うと、4年前から遠野に、津波や地震が来た時のために防災センターを建てようという県の方針があったからだ。遠野は大花崗岩地帯が下にあって、どんなところが倒れても、遠野は倒れないと言われている。それだけ地盤が固く、今回、一つも建物が倒れた所はなかった。

岩手県で倒れた所というのは、4月8日の余震で倒れた。一関、前沢は、ニュース報道は全然出なかったが、4月8日の地震でかなりの蔵や家が倒壊している。ところが、報道は津波の方ばかりで地震の話がちっとも出てこなかった。だから今のマスコミ報道の在り方というのは、かなりあやしい。現場に行って、自分の目で見るというのが災害時のありようだ。マスコミの話は信じたらだめだというわけではないが、ほとんど信用ならないというのが今回はっきりした。

実際に、テレビ中継は、地元を知らず、誰に相談したらいいかわからず、情報源がないので、行ったり来たりして一生懸命車で回っていた。だから、こういうときこそ信頼ある人間がポイントポイントにいて、そういう人々とNPO、NGOのネットワークを結び、行政と一緒にやるという仕組みを作らなければだめだ。最終的には、何をやるにしても行政との協議が必要だ。そのためには、地元の地域に、信頼ある人間がいるかどうか重要である。私は釜石にそういうメンバーがいたから動けた。なんでも釜石の人たちと議論して、全て釜石を通してやる。地域の市役所のOBや民生委員等の人々とツーカーの関係でやっていたからこの活動ができた。そのためには日頃そういう方々とおつきあいしておくといよい。

もう一つは、色々な物資が集まってきても運ぶ手段がないときには、私の取引業者の人々が、多田さんのためなら、と言って、全部協力してくれた。これまで、色々な取引をしながら、私は必ず期日までに金を全て支払っていた。たとえ1日でもずれると、信頼関係が崩れてしまう。また、中小企業というのは資金繰りが大変なので、彼らが困ったときは助けてあげていた。人間は苦しいときに助けてもらおうといつか恩返ししたいと思う。そうやって長い時間をかけて作った信頼関係があったからこそ、今回、釜石へトラックでもっていくのをお願いすると、必ず持って行

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ってくれた。そういう意味では、毎日企業人としてどういう信頼を築くかが重要である。日頃の信頼関係があつてこそ、異常時にそれが発揮できるということだ。そういう意味では、私は今回やはり今後の経営者のありようというものが日本の場合大事であると思った。

それから、原発の関係だが、福島の人たちが5月1日に私の所に来た。福島は原発で大変だが、釜石はどんなものか見たいという。彼らは、福島に比べれば釜石は全然大丈夫だという。彼らとそこで議論して一致したことは何か。この国をだめにしたのは、学識経験者ではないかという話になった。色々な新しい技術があるが、行政官庁というのは学識経験者の意見を聞いてからだ。これで時間を食う。学識経験者の意見はコスト計算できない。これが問題だ。だから、今回、発電の問題が色々あるが、民間はもっと先に行っている。オーストリア、スイスがバイオマスの研究では世界トップクラスで、国際基準だ。日本の場合は、学識経験者の意見を交換してからということになるが、この仕組みをやはりスピードを上げてやらないと、なかなか実用化まで難しいだろうと言うのが我々の意見だ。

今回の震災で日本の弱点、良いところ、色々なものを私は知ったし、色々な人間もうごめくということも知ったし、震災の後には必ずバブルがあるということも知った。そういう意味では、チャンスとリスクというのは常にうらはらにある世界が日本、あるいは震災にはあるのだ。それを正しく導くのは誰か、それがリーダーシップだろうという風に見ている。リーダーシップを発揮するには、私利私欲がない人間が当然必要だろうし、高いところからものを見るということだ。

それから、NPO・NGOの人々は金があるから、上から目線で話をされて頭に来たというのをけっこう聞く。自分が稼いだ金ではなく、寄付で成り立っているのだから、地元の方々と寄り添って、情報交換しながら組み立てていくという仕組みを作らなければいけない。それが今、不足しているような気がする。

4. 質疑応答

Q1：国会議員や国家公務員というのは、非常時のためにいると思うが、実際には非常時に役に立っていないのが問題ではないか。

多田氏：今の日本の政治家は、日頃から構想を持っていないことが問題である。むしろ一人ひとりの日本人の方が遥かに色々考えていると、今回のボランティアの人々を見て感じた。だから、一般市民の方が良識的でまだまだ可能性はあると思った。

Q2：海外から義援金や支援金が寄せられた時に、そのお金が行く場所というのはどんなときも議論になる。後になってみないとお金の行った先や使い道が分からないことが多い。しかし、今回は、多田氏がブログを立ち上げて、活動状況を分かるようにしてくださったので、分からないところよりも多田氏のところに送るように我々のネットワークをリンクさせた。

多田氏：おかげさまで、500万円程お金が集まった。うちの場合は、物資ではなくて温泉ツアーや炊き出し等に全部使わせていただいたが、これは被災者の方々に本当に感謝された。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

太平洋のプレートが今動いているということだから、今度どこでまたそういうことが起こってもおかしくない。そのときには、まず自衛隊と警察はすぐに動く。そして、民間のボランティアとして、本当のプロフェッショナルのマネジメントができる人間が必要だと思った。そういう意味では私は素人で、ボランティアを使うのは初めての経験だった。情報を集めながら、お風呂をどうする、食事をどうする、さらには明日の日程はどういう仕事をさせる、とやるのは大変だった。そこで、NGO・NPOの在りようも、真剣に考えなければならぬと私は思った。

鈴木理事長：阪神大震災の時は義援金が被災者の人に渡されたのは9カ月後だったそうだ。義援金というのは、被災者の人にお金を渡すのだが、義援金を出すには、国と県と地方自治体の三つの審査委員会があるらしいので、チェックに非常に時間がかかるようだ。また、今回の津波でも、全壊と半壊の区別が自己申請になってしまって、チェックのしようがない。気仙沼では、市役所等で残ったコンピュータが一台しかなくて、それで全部を処理しようとするとう時間がかかるとか、それぞれの事情があって時間がかかるという話を聞いた。

なお、ジャパン・プラットフォームは63億円集まったそうだが、すでにほとんど余ってないと言っていた。それから、今回他のNGOの加盟団体から話を聞いたところ、色々なNGOが何十万、何百万という単位で助成金を申請してくるらしいのだが、予算書の書き方が分からなかったりして、係員の人が説明に追わたりして、かなり混乱した状態だという。

多田氏：国際NGOの間違いは、物を配ることが援助だということを海外でやってきて、それを日本の被災者にやろうとすることだと私は言っている。日本では、物はもういらぬ。現実に、遠野の体育館には物が余りすぎて、ボランティアの人々が溢れた物の移し替えをしている。だから、国際NGOは、日本がハイチやインドネシアと違うということを考えなければいけない。実際に、オンデマンドをやったときに、一カ月経つと同じ人しかものを取りに来なくなった。しかも、同じ人が一日に3回も来る。その辺の引き際を考えないといけぬ。

鈴木理事長：アメリカでは300億円位集まったが、アメリカの支援というのは、物を買って送ってくるそうだ。どこかの仮設の冷蔵庫はGEのもので、すごい輸送料をかけて送ってくるという話だ。

多田氏：各国の色々な人が相談に来ている。アメリカから靴一万足を送りたいと来たときには、受け入れるところが結局なかった。彼らは物を送ることが善意だと思っている。なお、ベントはトラックを10台送るという話だった。ただ、左ハンドルのトラックで、1台は貰ったが、修理等が大変である。今の震災関係の物資とお金は、ある意味バブルだといえる。

なお、岩手県の宣教師というのは、スイス人が開いたものだ。スイスは援助するにあたって、政府や行政が入るとどうなるか分からないから、独自の民間の人たちで組みたいということで、今スイス人がいっぱい来ている。電力の問題、バイオマスの問題、都市の設計の仕方等、スイス人は得意らしいので、どこと組んだらいいかという話で、私のところに来ている。

Q3：仮設住宅は全部できているということだが、入居した人たちは、これから新しく家を建て

るのか。

多田氏：仮説は法律では2年といわれているが3年から4年いると思う。次は復興住宅ということになり、また移動しなくてはならない。神戸の例でいうとだいたいそうなるのだが、現状、神戸と違うのは、岩手県は地価が安いということだ。だから住宅を建てる際に土地が担保にならず、家を建てることができない。住宅については個人の問題となるので、今後、大変な問題になると思う。

Q4：お金を義援金として出すのではなく、復興のための投資として自分のお金を使ってほしいという気持ちを持っている人がけっこうたくさんいる。投資する側としてはリターンを期待するわけではなく、いずれはそれが生かされて復興して、生産が始まれば、その作ったものを配当するというNPOバンクという仕組みがあるがそれについてはいかがか。

多田氏：それは活動としてはあまり見えていない。やはりマスコミに出た企業がかなり金を集めている。たとえば陸前高田では、一つの会社で4000万円位集めたところがある。しかし、ほとんど無名に近いようなところでよいものを作っている人がけっこういる。そういうところと連携するような仕組みをこれから生み出していかなければならないと思う。

私も本業が忙しくて、できればこの仕事を切り上げたいと思っている。というのは、今回の件で、ヨーグルトが非常に不足して、4月5月6月に爆発的な売り上げを上げている。本業があつてこそこちらができるのだが、地域に私のようなことをやる人がいないので困っている。日頃から何らかの形で地域との関わりを持ったり、そういう人材を作ったりしておかなければならない。

一方で、これまでは注目度が低かったが、世界に向かって三陸というブランドを立ち上げるチャンスでもある。これまでこの地域は、農業や漁業だけでやってきて、大きな農協や漁協という組織の中で生きてきたから、あまり自己主張をせずにきた。だからこれを機にもう少し我々は発言して、仕組みを作っていく必要がある。そういった意味では、大阪や東京の人が行って一緒にやるという手もあると思う。

Q5：①三菱商事では、スピードと継続性をポイントとして、4年間で100億円を出すと決めた。その中のプロジェクトの一つで、奨学金を出すことになり、50人の定員で募集をしたところ、63人が集まり、全部やろうということになったが、そういうやり方についてどう思われるか。

②北海道の当別町では、たとえば東北にいる、農業に従事されていた方々に来ていただいて、家賃はほとんどただで、農業をやっていただくという案がある。そのようなことをやった場合、被災者の方へのプラスになるのだろうか。

多田氏：①今、中高生の学力低下の問題が心配されている。釜石の生徒の学力をどう上げたらよいかということで、一軒家を借りて夏休みだけでも塾を開き、東京の学生に来てもらって、一年間通して学校でできない部分を塾でカバーする仕組みを作ろうかという話の一つある。

②農業の問題については、実際に、九州や色々な所から来てもいいというメッセージがあったが、誰も行かなかった。気持ちはとてもありがたいが、農業者というのは人生をチェンジするという

ことを経験したことがない。

もう一つ、実は色々な商社から、色々な金の話が来ていた。ところが、甘い話には必ずどこかに落とし穴がある。ある程度の金額を出して、従業員がある人数以上を超えると、絶対に商社から役員を派遣してよこす。最終的に売り上げを自分の系列下に入れようとするのだ。だから、借金してリスクを背負ってやるか、それとも最終的には商社の下でネットワークの下で働くかということになると思う。でも私は、基本的には事業というのは自分で苦しくても借金してやれと言っている。そういう風にして地域企業の援助の仕方というのは、最終的には地元の方々がりiskを背負うという教え方をしなければだめだ。

Q6：学生は被災地のために何ができるか、何をしたらよいか。

多田氏：とりあえず一回、ボランティアに来た方がよい。ボランティアというのは6泊7日コースで、1週間いるというのが絶対条件である。仙台の方で保険をかけ、学生の方々がバスで釜石に来る。釜石はボランティアのやり方がきちんとしていてすばらしい。待遇がよいため、皆2回3回と来ている。他の地域では、ボランティアの扱いが雑なために、問題がおきている。釜石の場合うまくいっているのは、最初に基本の路線を私たちがちゃんと作って、その後、今は常駐する方がいて、サポートを全部して、食事の面から衛生の面から全部やっている。そのような仕組みを作ったところに行った方がよい。

そこで、最初の1週間いて雰囲気確かめた方がよい。それから次のステップとして、我々が子どもの学力を上げる塾の仕組みを作った時に、ボランティアに来るといって次元を上げていかなければならない。また、こうしたことにはお金がかかるから、国がボランティアのための資金を補助する等して、バスか何かで学生を連れていくような仕組みを作らなければならない。

鈴木理事長：今回の災害でMPJも定款を変えて、国内の災害救助活動もできるようにした。MPJユースの会といって40人程、東大生中心の学生メンバーがいて、子どもたちに勉強を教えたいと言っていたので何かできるかもしれない。

多田氏：塾の件は早急に理事長に相談して、釜石の方で仕組みを作る。

Q7：震災後の早い時期にできた仮設住宅というのはどうしてもスピード重視なので、欠陥が伴ってしまうのはある程度は仕方ないことで、そこに入居された方が生活してみてもあまり快適ではなく、避難所にいた方がよかったというのが口コミで広まってしまって、なかなか入居者が増えないという話を噂で聞いたがいかがか。

多田氏：こうした話は、具体的にどこの町のどこの地域でその話が出てきたかと言うのが大事だ。一般的な話というのは、それが先行して、全てのところがそうなっているという捉え方をしてしまうのはとても危険なので絶対にしたくない。ただ、釜石に関しては仮設住宅には全て入居している。陸前高田は、おそらく建てる場所がないので遅れているのだと思う。そういう意味で格差は出るだろうと私は思っている。だから、地域住民の方々がそういう苦情を話す仕組みがあるかどうかというのが大きい。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

避難所では、早くプライバシーの確保をしなければいけなかった。しかし今、仮設住宅へ行くと、番号ばかりで名前が出ていない。なぜ名前がないのかというと個人情報の関係だというのが、これはおかしいと思う。現状では、どこに誰がいるのかわからないのだ。だから、仮設住宅のどこかにセンターを作って、訪ねてきたときに名簿があって、どこの誰がどこにいると分かる仕組みを早く作るように言っている。実際に、抽選で当たって住んでいるものだから、隣に誰がいるかも全く関心がなく、これは問題である。今後は、コミュニティをどうするかというのが大きな問題だと、我々としては話をしている。

以上